

きしょう春秋

(毎月10日発行)
 発行:気象春秋会
 ☎105-8431
 東京都港区
 虎ノ門3-6-9
 ☎03-6403-1896
 (FAX 兼用)
 火・木 常駐日
 振替口座
 00160-0-38123

常任会議開催 運営委員会議案等を審議

事務局

上半期のまとめと運営委員会など

に向けての方針を討議するため、10

月26日に常任会議を虎ノ門事務局

で開催しました。会議には上平会長
ほか、常任会議メンバー全員が出席
しました。小成親睦委員長はオンラ
イン方式で自宅からの参加でした。

1. 報告

(1)会員動向 (10月26日現在)

・新規加入 1名

・逝去者 7名

・途中退会者 7名

・会員数 335名

(2)予算執行状況 (4月～9月)

・収入 当初予算比98%の執行状

況で、ほぼ予算通り。

・支出 当初予算比47%の執行状

況で、ほぼ予定通り。

(3)各委員会からの報告

◆総務委員会

・退職予定者の把握ができれば例年
通りの時期に入会案内を行いたい。

・会員数の減少や高齢化などで問
題が山積しており、引き続き会則
改正等を検討していく。

◆広報委員会

・会紙の発行は予定通りに進んで
いる。感染防止のため編集作業は
メール交換で行った。

◆親睦委員会

・感染状況が良くなれば、麻雀例
会、囲碁例会を再開したい。囲碁
例会は会場が確保できていない。

麻雀例会は年内に1回できるか会
員に当たってみる。

2. 議事

◆運営委員会は11月28日(日)
に虎ノ門の国土交通労組事務室を
お借りして開催する。希望者には
インターネットによるオンライン
参加も準備する。

◆会則の改正時期は再来年の総会

真鍋さんのノーベル物理学賞に接して

茨城県鹿嶋市

古川 武彦

を考えているが、間に合えば来年
の総会に提案する。運営委員会
で方向性を議論してもらおう。
◆会員名簿を全会員に配布すること
は個人情報関係で難しいと考える
が、運営委員会で議論してもらおう。

日本の数値予報は半世紀以上も
前、昭和34年(1959年)3月
に始まった。その1か月前に電子計
算機IBM704が横浜港に陸揚
げされ、大手町に向かう大型トレ
ラーの横には、「Welcome IBM704」
「東洋で最初の超大型電子計算機」
などの文字が躍っていた(写真1)。
アメリカでの数値予報の開始は1
955年で、日本は世界で2番目
であった。電子計算機といっても約8
000本の真空管回路、記憶装置は
磁気テープであった。年間リース料
は1億5千万円で、性能は現在のパ
ソコンに遠く及ばなかった。

数値予報の開発は1950年代
から気象庁と東大気象学教室のメ
ンバーによるNP (numerical
prediction)グループが始まり、
正野重方教授の指導の下で研究者
が心血を注いだ。写真2はNPグル
ープ
(柳井
迪雄氏
提供)
の揃い
踏みで、
真鍋さ
んは左
端の立
ち姿、
最前列
に岸保
勘三郎



写真1 大手町に向かうトレーラー



写真2 NPグループのメンバー

さんや増田善信さんが写っている。真鍋さんは東大時代から、相手が目上であっても納得しなければ他人の言うことに従わず、自分の道歩んだようだ。研究室で仲間であった駒林誠さんによると、こんなエピソードがあった。

正野研究室の宿題が「大気大循環について知るところを記せ」であったが、真鍋さんは1枚のレポート用紙に積分記号が付いた4本の式が

並べてあるだけだった。先輩の都田菊郎さんが真鍋さんに、「このレポートは短すぎると思う。正野先生に叱られた」といった。「どこが悪いですか。間違っていますか」と真鍋さん。「いや間違っていないが、解けばよいとだけ書いてあるのでは短すぎる」と都田さん。真鍋さんは「解きやすいんでしよう。解きやあ」と大声を出した。都田さんは「真鍋さん、ここで息巻いてもらっても困ります。息巻くなら正野先生の部屋に行ってください」。結局、真鍋さんは、レポート用紙に向かった。

さて、数値予報開始の翌年、第1回数値予報国際シンポジウムが東京で開催され、「傾圧不安定波」を解明したチャーニー、バタフライ効果のローレンツなど、世界から著名な研究者が一堂に会した。真鍋さんも参加した筈だ。一方、私は有楽町の読売ホールでの一般向け講演会に参加し、チャーニーの講演直後に、聴衆をかき分けて歩み寄り手帳とペンを差し出すと、「Julie G. Charney」とサインをくれた。若い

時分から、ちよつと変わっていた自分だった。

真鍋さんの業績については、増田さんが紹介される筈なので、私は彼の活躍や人柄などについて、私事を交えながら触れたい。彼は東大大学院を終えて、1958年にアメリカ東部プリンストン大学に近い米国大気海洋庁のGFDL(地球流体力学研究所)のスマゴリンスキーに招かれて渡米した。いわゆる「頭脳流出組」の一人である。

真鍋さんに初めてお目にかかったのは、私が予報課長時代で、彼の「朝日賞」受賞記念講演会(1995年)である。身振り手振りで、いかにも楽しそうな顔つきでの語り口が強く印象に残っている。2004年には、私もソウルでの第2回日中韓気象学会合同国際会議に廣田勇理事長の代理で出席し、下手な英語で祝辞を述べた。真鍋さんの招待講演(注)は身振り手振りで、また非常にわかりやすい英語で、拍手がなかなか鳴り止まなかった。

私事ですが、私は平成9年(1

997年)に気象庁を辞してから今日まで、明治初期の中央気象台創立以来の観測や予報などに携わった先達の足跡をたどり、記録する活動を続けている。この間、「人と技術で語る天気予報史」(東大出版会…

今月号の主な記事

常任会議開催	1
運営委員会議案等を審議	1
真鍋さんのノーベル物理学賞に接して	1
地球温暖化の先駆的研究者	1
ノーベル賞の真鍋淑郎さん	4
雑感―政治と学術	6
賃上げどころか踏んだり…公務員	7
夜中に首都圏に発生した強い地震	8
国公退職連の動き…懇談会	9
東京気象支部 定期大会開催	11
事務局次長の伊勢崎さん退任	11
新年号の写真と…原稿募集	11
枕詞または標語	12
岡田健吉さんを偲んで	12
岡田健吉さんを偲ぶ	13
大川雅弘さんをしのぶ	13
大川雅弘さんを偲んで	13
気象の話題	14
春秋会俳壇	14
事務局からのお知らせ	15
麻雀・囲碁例会・合同旅行	15
今後の会議	15
会員の弔事	15
訃報	16
会員の広場	16
緩急車	16



写真3 GFDLの玄関での真鍋さん(右)と都田さん(左)

2012年)、「気象庁物語」(中公新書・2015年)などを著した。その中で上述のNPグループの活動や頭脳流出にも触れ、若き日の真鍋さんのエピソードも紹介している。

そんな中で2008年夏、大なりリュックを背負って、「頭脳流出組」のその後を辿るべく、1週間 にわたってアメリカに旅し、プリンストンで真鍋さんと都田さん、ニューヨークで台風の大山勝道さんの家族、オクラホマでトルーネードの佐々木嘉和さん、カルフォルニアのUCLAで熱帯気象の柳

井迪雄さんと大循環モデルの荒川昭夫さん、最後にスクリップス海洋研究所で、気象庁の全球モデルの級数を用いる手法を開発した金光正郎さんを訪ねた。

プリンストンでは、真鍋さんは「ねー、そうではないですか、古川さん」と伊予弁交じりで話しながら、大学の広い構内を研究室まで案内してくれた。自分の若さを誇示しているかのように、私を置き去りにするほどの速さで、樹木間の小道を抜け、赤レンガ色のキャンパスの周りを巡って、研究室に導いてくれた。写真3はGFDLの玄関での真鍋さんと都田さんである。

以前、岸保さんが真鍋さんの努力ぶりを明かしてくれたことがある。岸保さんがワシントンで会った時、彼が英会話を習得しようとしていた姿を垣間見てひどく感激したという。彼はレストランで、普通は話をしないような一見労働者風の人を相手に会話をやっていたのだ。話が変わるが、受賞決定後のインタビューで真鍋さんは、奥さんが

あつてこそ今の自分があると感謝を捧げておられるが、プリンストンでは「Manabe」と言えばMrs. Manabeの方が有名で、面倒見がいいとの評判を耳にした。蛇足だが高等研究所の書庫で、かつて岸保さんをプリンストンに招聘したチャーニーの手紙も見つけた。

この二人は前述の国際シンポジウムで再会し旧交を温めた。真鍋さんは、一度帰国して要職に就いたが、結局、アメリカに移住する道を選んだ。主たる理由は、アメリカには彼の自由闊達な思考や方法論を受け入れる環境があったからだと言われている。今回の受賞時に現地の記者会見で以下のようなやり取りがあった。

(記者) 日本からアメリカに国籍を変えた主な理由は？
(真鍋) 面白い質問です。日本では人々はいつも他人を邪魔しないようにお互いに気遣い調和的な関係を作っています。日本人の仲がいいのはそれが主な理由です。他人のことを考え、邪魔になることをし

ないようにします。日本で「はい」「いいえ」と答える形の質問があるとき、「はい」は必ずしも「はい」を意味しません。「いいえ」の可能性もあります(会場から笑い)。

彼らは他人の気持ちを傷つけないから、他人の邪魔をしたくないのです。アメリカでは自分のしたいようにできます。実を言うと、他人を傷つけたくありませんが、同時に他人を観察したくありません。何を考えているか解明したいとも思いません。私のような研究者にとっては、アメリカでの生活は素晴らしいです。

アメリカでは自分の研究のために好きなことができます。私の上司は、私がやりたいことを何でもさせてくれる大らかな人で、実際のところ、彼はすべてのコンピュータの予算を確保してくれました。私は人生で一度も研究計画書を書いたことがありません。使いたいコンピュータをすべて手に入れ、やりたいことを何でもできました。それが日本に帰りたくない一つの



写真 真鍋淑郎さん

1 真鍋さんと私
真鍋淑郎さん(写真)がノーベル物理学賞を受賞した。約50年も前に地球温暖化の危機を警告した研究者だ。気候危機が叫ばれるようになって久しい。ノーベル賞受賞は、遅きに失した感さえする。真鍋さんとは1950年代後半

地球温暖化の先駆的研究者

東京都狛江市

ノーベル賞の真鍋淑郎さん

増田 善信

理由です。何故なら、私は他の人と調和的に生活することができないからです。(会場から笑い)
本稿を閉じるにあたって、真鍋さんは「好奇心」を旨に生きて来たと言われているが、10歳近く下の私

は「少年のように生きる」をモットーに、残りの人生を過ごしたい。
(注) Simulated Long-term Change in Water Availability due to Global Warming
(2021年10月20日)

以来の学友で、毎年クリスマス・カードを交換している。真鍋さんがまだ東京大学の大学院生で、数値予報の草分け時代で、「数値予報グループ」が結成された時だった。正野重方東大教授が、当時の金で100万円の朝日学術奨励金(朝日新聞社)を受けて、グループ活動を開始し、議論を闘わせたものだ。

博士論文は日本列島の気候と

日本海の関係を取り上げて、日本海周辺の高層観測データから「熱収支」を求めた独創的な研究だった。1958年に卒業し、プリンストン大学のスマゴリンスキー教授の招請を受けて渡米した。いつも研究を楽しんでおり、口癖のよ

うに「アイディアが大事。基礎研究をきちんと」と言っていた。

2 真鍋さんと地球温暖化

寄贈していただいた最近のご著書(注)を用いて、真鍋さんの温暖化についての研究をサベイスる。

真鍋さんは先ず、スウェーデンの物理化学者アレニウス(1859~1927年)の「CO₂(二酸化炭素)が2~3倍になると地球の表面温度は氷期と間氷期の差くらい暖まる」という先駆的な予言を取り上げ、CO₂が増えたときの地上気温だけでなく、大気全層の気温分布を求めた。

図は真鍋さんの「放射-対流平衡モデル」に、水蒸気の効果も入れたモデルで、CO₂の濃度が150、300、600ppmの時の大気全層の気温分布である(1967年)。この図は日経サイエンスで紹介

介されたものを白黒に変換しているので、分かりにくいのが、CO₂が増えると、対流圏では温暖化、成層圏では放射平衡のために逆に寒冷化することが明瞭に示されている。しかも、気温上昇は地上気温が最も大きく、CO₂が増えれば増えるほど大きくなる。真鍋さんは約50年も前に、現在の気候危機を予測していたのである。

しかし、真鍋さんはこれに満足せず、大気大循環のモデルを使って、実際の地球大気に挑んだのである。このシミュレーションには高速・大容量の電子計算機が必須で、真鍋さんの研究は計算機の発

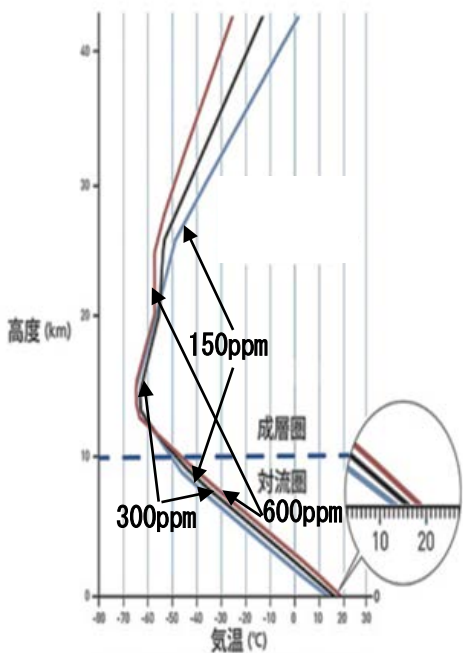


図 CO₂濃度が150ppm、300ppm、600ppmのときの気温分布。対流圏と成層圏で逆順